イスラーム国

保坂修司（エネルギー経済研究所研究理事）

はじめに

イスラーム国（アラビア語 : al-Dawla al-Islāmīya、英語 : Islamic State、仏語 : État islamique、以下 IS と略）は、2014 年 6 月末にイラク西部のマウシルで「建国」宣言を行ったテロ組織である。「国」という語はついているが、国際社会で承認された「国家」ではなく、テロ組織の自称として一般には認識されている。

したがって、たとえば、アラビア語のメインストリームのメディアでは、組織名“al-Dawla al-Islāmīya”のアラビア文字の頭文字をとって“DĀ‘ISH（ダーイシュ）”と呼ばれたり、組織名のまえに「組織」を意味するアラビア語“Tanẓīm（タンジーム）”をつけて“Tanẓīm al-Dawla al-Islāmīya”、すなわち「イスラーム国組織」などと呼ばれたりしている。英語でも、誤解を避けるため、Islamic State ではなく、略称の IS、あるいは改称前の略称である ISIS（Islamic State of Iraq and al-Shām）や ISIL（Islamic State of Iraq and Levant）が用いられることが多い。日本では（そして米国や国連でも）、ISIL の名称が公的機関においては用いられることが多い。一方、メディアでは、たとえば NHK は、過激派組織 IS＝イスラミックステートという表現を用いており、朝日新聞などでは「イスラム過激派組織『イスラム国』」と呼んでいる。

IS は現時点ではイラクとシリアを拠点としているが、世界各地に「県」と呼ばれる支部を有していると主張しており、さらには、その「県」を超えて、欧米などでもテロを起こしている。2001 年の 9/11 事件を惹き起こしたアルカイダ（アラビア語 : Tanẓīm Qā‘ida al-Jihād、英語 : , Alqaeda、al-Qaeda、al-Qaida 等、以下 AQ と略）に勝るとも劣らない脅威を全世界に与えている。

１．IS の起源

IS の源流は、直接的にはイラクで活動していたヨルダン人テロリスト、アブームスアブ・ザルカーウィー（Abū Muṣ‘ab al-Zarqāwī）の「タウヒード（神の唯一性）とジハード団（Jamā‘a al-Tawḥīd wa al-Jihād）」にさかのぼることができる。同グループは 2004 年、AQ のオサーマ・ビン・ラーデン（Usāma b. Lādin）に忠誠を誓って、「二大河の国のカーイダトゥルジハード組織（Tanẓīm Qā‘ida al-Jihād fī Bilād al-Rāfidayn）」と改名、AQ のイラク支部（AQI）となっていた[1]。

AQI は米国によるイラク占領中、単に米軍やその「傀儡」を攻撃するのみならず、イラクにいる外国人を誘拐したうえ、斬首してその模様をインターネット上で公開するなど、きわめて残虐な戦術で恐れられていた。主たる標的となった米軍やシーア派政権のみならず、一般のイラク人や同じイデオロギーをもつ他のスンナ派グループをも恐怖させ、米軍占領下のイラクにおける最強・最悪のテロ組織とみなされたのである。

AQI はイラク国内の有象無象のジハード主義組織と対立や離合集散を繰り返し、2006 年 1 月にはいくつかの組織を糾合して「イラク・ムジャーヒドゥーン諮問評議会（Majlis Shūrā al-Mujāhidīn fī al-'Irāq, Mujahidin Shura Council in Iraq, 以下 MSCI と略）」を結成した。ただし、その指導者はザルカーウィーではなく、アブダッラー・ビン・ラシード・バグダーディー（'Abd Allāh b. Rashīd al-Baghdādī）であった。

2006 年 6 月にザルカーウィーが米軍の攻撃によって殺害されると、AQI は緊急会合を開催し、アブーハムザ・ムハージル Abū Ḥamza al-Muhājir をザルカーウィーの後継者に選んでいる。ただし、ムハージルはあくまで AQI の司令官であって、MSCI は依然として AQI の上部組織と位置づけられている。

2006 年 10 月、MSCI は、いくつかの部族長らを集め、新たな連合体「香しきものたちの同盟（Ḥilf al-Muṭayyabīn）」[2]を結成した。しかし、この同盟発表の数日後、MSCI はイラク・イスラーム国（Dawla al-'Irāq al-Islāmīya, Islamic State of Iraq, 以下 ISI と略）の「建国」を宣言している。ちなみに、ISI はこのとき、リーダーのアブーオマル・バグダーディー（Abū 'Umar al-Baghdādī）に「信徒の統率者（Amīr al-Mu'minīn）」としての忠誠を誓うよう、イラクのすべてのムジャーヒドたち、ウラマーたち、そして部族長たち、全スンナの民に呼びかけている[3]。

ここで彼らが信徒の統率者という肩書を持ち出したのはさらに重要である。信徒の統率者とは、第 2 代カリフ、オマルが最初に用いたとされるタイトルで、オマル以降、事実上信徒の統率者といえばカリフのことを指すようになっている[4]。つまり、ISI はまさにのちのカリフ国家 IS のための下準備をしていたのだと考えられる。

また、アブーオマル・バグダーディーは 2006 年 12 月の声明から、みずからの名前をアブーオマル・フセイニー・クラシー・バグダーディー（Abū 'Umar al-Ḥusaynī al-Qurashī al-Baghdādī）と名乗るようになった。もちろん、フセイニーは預言者ムハマドの女婿で第 4 代カリフ、アリーの子であるフセインの系譜に連なることを意味し、クラシーとはクライシュ族出身者の意味である。カリフになるための条件のひとつにクライシュ族出身者という条項があり、アブーオマルはその要件をあらかじめ満たしていることをこの名前で主張

していると考えられる。したがって、幻想にすぎないとはいえ「国」を名乗り、また「信徒の統率者」という肩書を用いたこと、加えて「クラシー」と名乗ったこと、これらはすべてのちのカリフ国家宣言への布石ということができるだろう。

なお、もうひとつ重要なポイントとして、このときアブーハムザ・ムハージルが AQI を解体したといわれていることが挙げられる。AQI は、MSCI を構成する組織のひとつから、軍事部門として AQI に吸収されることになったのである。

一方、アブーオマルは、旧イラク軍の将校たちに ISI 軍への入隊を公然と呼びかけている。一般にこの時期、旧サッダーム・フセイン政権のメンバーが ISI に多数参加するようになったといわれている。

２．ISI のイデオロギー

ISI のイデオロギーは 2007 年に公開された声明のなかで以下のように明確に述べられている。

1) われわれはあらゆる多神教（shirk）の現象を攻撃・排除し、そのメディアを禁じることを義務と考える。
2) ラーフィダ（Rāfiḍa, シーア派）は多神教と背教（ridda）の宗派であり、顕教のイスラーム（al-Islām al-Ẓāhir）の教えの大半を適用することを禁じている。
3) われわれは魔術師（sāḥir）も不信仰者であり、背教者であると考え、それを殺すことを義務とみなす。
4) われわれは、姦通や飲酒、窃盗などの罪を犯したからといって、そのものが許されると主張しないかぎり、われらの礼拝の方向（Qibla）に向かって礼拝を行うムスリム男性に対し不信仰者認定を行うことはない。
5) われわれは、イスラーム国においてはイスラーム法廷を通じてアッラーの法にしたがって統治されねばならないと考える。
6) われわれは、預言者に敬意を表しなければならず、彼の許しをえないものを行ってはならならず、彼の名誉を傷つけるものを不信仰者とし、背教者としなければならない。
7) われわれは、民族主義、共産主義、バァス主義などあらゆる世俗主義が明白な不信仰であり、イスラームと矛盾すると信じる。また、われわれは、ムトラク、ドレイミー、ハーシミーの政党[5]のように政治プロセスに参加したものを不信仰・背教と考える。なぜなら、このプロセスのなかには、アッラーの法を置き換え、アッラーの

敵である十字軍やラーフィダに権力を与えるものだからである。われわれはまた、イスラーム党[6]の手法も不信仰・背教と考える。

8) われわれは、衣服・食料・医薬品など何であれ、占領者を支援するものを不信仰者・背教者と考える。そのようなものは、その行為により、われわれの標的となる。

9) われわれは、アンダルシアの陥落以来、ムスリムの地を解放するための、アッラーの道へのジハードをすべてのものに課された義務（farḍ ‘alā al-ta‘yīn）であると考える。

10) われわれは、不信仰者の法によって統治され、イスラームの諸規則の行われていない地を不信仰の地とみなす。このことは、われわれがその地の住民を不信仰者と認定していることを意味するわけではない。なぜなら、今日すべてのイスラームの地を治めている規則は、偶像の規則と法だからである。われわれは、これらの国の為政者たちすべてを不信仰者・背教者とみなし、彼らと戦うことが十字軍占領者と戦う以上の義務であると考える。したがって、われわれは、それらがアラブやイスラームの名で呼ばれていようと、イラクにおけるイスラーム国家を侵略しようとする軍と戦うことを明らかにしなければならない。

11) われわれは、偶像や背教の国家の警察や軍、そしてそのふたつから派生した石油施設を守る部隊などと戦うことを義務と考える。われわれは、暴君のために建てられたいかなる建物・施設をも攻撃し、破壊することを義務と考える。

12) われわれは、啓典の民やその他サービア教徒など、今日イスラーム国家（Dawla al-Islām）にいるものたちを、庇護民としての権利がない戦争の民（Ahl Ḥarb）とみなす。彼らはすでにさまざまなときに契約したことを破棄している。彼らが治安と安全を望むなら、彼らはイスラーム国家との契約を新たに結び、彼らが違反してきた、（第 2 代カリフ）オマルの条件[7]に合意しなければならない。

13) われわれは、戦場で活動するジハード諸組織の子らを宗教における同胞とみなし、彼らを不信仰や罪で非難することはない。ただし、彼らは、ひとつの旗のもとに集まるという時代の義務にしたがわねばならない。

14) 占領者と合意を結ぶ、すべてのグループあるいは個人も、われわれはいかなることにおいても認めないし、それは無効である。われわれは占領者たちに対し、イスラーム国家の許可なしに秘密協定、あるいは公開の協定を結ぶことを警告する。

15) われわれは、活動的で友好的なウラマーを尊重することを義務だと考える。われわれは困難なときには彼らを保護し、支援する。しかし、われわれは、アッラーの宗

教を蔑ろにして、偶像崇拝の道を進み、それにおもねるものを暴いていく。

16) われわれは、われわれのまえにジハードを行ったものの権利を認め、彼にふさわしい地位を与え、彼の家族や財産を守る。

17) われわれは、戦争捕虜とムスリムたちの妻を、攻撃や犠牲によって不信仰者の手から救うことを義務とみなす。同様に、われわれは、彼らの家族や殉教者の家族を支援することも義務とみなす。

18) われわれは、たとえ現世的な利益の一部を失ったとしても、共同体がその宗教について知ることを義務と考える。われわれは、現世的な知識について、共同体がそれを必要とするかぎり、義務だとする。

19) われわれは、衛星放送のように邪な行為を呼びかけるものを禁止すべきと考える。われわれは、女性が顔を隠すことを法的な義務であるとし、顔を出したり、男女が同席したりすることを避け、貞節さと純潔を守らねばならないと考える。

なお、現在、IS の「国旗」として知られる黒い旗が ISI の国旗として定められたのも 2007 年であった。預言者のスンナ、預言者ムハンマドの教友のことばやイスラーム法学者たちの説を取り入れ、旗（軍旗 rāya）の色は黒とし、そこに「アッラーのほかに神なし」と「ムハンマドはアッラーの使徒」という文言が書き込まれることが定められたのである。「ムハンマドはアッラーの使徒」の文は預言者の封印（の指輪）からとられ、3 行に書かれる。また旗のかたちは、預言者の旗のかたちにもとづき、正方形とされた。なお、この旗の基本デザインはアラビア半島カーイダトゥルジハード組織（Al-Qaeda in the Arabian Peninsula, AQAP）も同じである。

ちなみにこの書体は、預言者ムハンマドがアラビア半島やその周辺の為政者たちに対しイスラームへの入信を呼びかけた書簡と類似しているとの指摘がある。2007 年 1 月の声明では、オスマン帝国の写本からとったことが示唆されている。

３．アブーバクルの登場

ISI の活動は米軍の関与した覚醒評議会の結成などもあり、イラク情勢は 2007 年以降、急速に鎮静化してきた。テロの件数やテロによる死者数も激減していった。こうしたなか、2010 年 4 月にはバグダーディーとムハージルという 2 人の指導者が米軍に殺害されてしまう。ISI は翌月には新しいリーダーにアブーバクル・バグダーディー・フセイニー・クラシー（Abū Bakr al-Baghdādī al-Ḥusaynī al-Qurashī）が就任したと発表した。合わせて副官としてアブーアブダッラー・ハサニー・クラシー（Abū ‘Abdullāh al-Ḥasanī al-Qurashī）が、さら

に戦争相としてアブースレイマーン・ナーセル・リ・ディーニッラー（Abū Sulaymān al-Nāṣir li Dīnillāh）が任命されたことも明らかにされた。

しかし、この時期、ISI のイラクにおける活動は停滞していた。イラクではテロ活動そのものも下火になっていたので、このままシーア派政権の統治がイラクで確立するのではないかとの予測が強まっていた。実際、2011 年末に米軍がイラクから撤退したあとも、イラク情勢は比較的安定していた。また、2010 年末からはじまった、いわゆる「アラブの春」であいついで中東の独裁体制が崩壊しても、イラクは体制を維持していたのである。

しかし、その一方で、2011 年夏ごろからシリアでは情勢が一気に悪化し、内乱状態となっていた。シーア派のイランなどが支援するアラウィー派のバッシャール・アサド体制とそれに反対するスンナ派武装勢力という、きわめてわかりやすい二項対立がシリアで成立すると、アサド体制をジハードの対象とするスンナ派武装総勢力が新たなジハードの大義に惹かれるようにシリアに参集、戦場となったシリアを新たなジハードの拠点としたのである。ISI がイラクで息を吹き返したのはまさにそんなときであった。

４．シリアへの展開

2012 年 1 月、インターネット上に「ジハードのシャーム」というタイトルのビデオが投稿された [al-Jawlānī, Jihād al-Shām 2012]。これがヌスラ戦線（Jabha al-Nuṣra）の設立宣言である。リーダーのアブームハンマド・ジューラーニー（Abū Muḥammad al-Jawlānī, 正則アラビア語ではジャウラーニー）は、ジューラーニーという名前からイスラエルによって占領されているシリアのゴラン高原生まれであろうと考えられるが、はっきりわからない。報道等をまとめると、ジューラーニーは、イラク戦争後、イラクに入り、ザルカーウィーの側近となったとされる[8]。ジューラーニーはその後、順調に出世し、マウシルの作戦司令官になったが、その後、シリアが内乱化すると、バグダーディーの支援を受け、シリアに向かった。これがヌスラ戦線の起源である。

ところが、2013 年 4 月、アブーバクル・バグダーディーが突然、ISI がシリアで反アサド武装闘争に従事していたヌスラ戦線と合併、組織名を「イラクとシャームのイスラーム国 ISIS」と改称し、旗も ISIS のものに統一すると発表した。そして、これに対しヌスラ戦線側は ISIS との合併を拒否したのである。

一方、アルカイダの指導者、ザワーヒリーが仲介に入ったが、ISIS 側がこれを拒否、アルカイダと ISIS は絶縁してしまった。他方、ヌスラ戦線側は、ザワーヒリーに忠誠を誓い、以後、アルカイダのシリア支部として活動することになる。

５．ISIS からイスラーム国へ

ISIS の公式報道官、アブームハンマド・アドナーニーは 2014 年 6 月 29 日、インターネット上に投稿された音声声明で、「解除と契約の民」に代表されるイスラーム国がイスラームのカリフ制（ヒラーファ khilāfa）を樹立したこと、およびイブラーヒーム・アウワード・イブラーヒーム・ビン・アリー・ビン・ムハンマド・バドリー・クラシー・ハーシミー・フサイニー・サーマッラーイー（Ibrāhīm ‘Awwād Ibrāhīm bin ‘Ali bin Muḥammad al-Badrī al-Qurashī al-Hāshimī al-Ḥusaynī al-Sāmarrā’ī）に全ムスリムのカリフ（al-Khalīfa）として忠誠を誓うことを決定したと発表した。

もちろんサーマッラーイーとは ISIS のリーダー、アブーバクル・バグダーディーのことであり、彼は忠誠の誓いを受け入れ、全世界のムスリムたちのイマームとなり、カリフとなった。また、これに伴い、ISIS の名から「イラクとシャーム」という地名が削除され、正式名称は「イスラーム国（al-Dawla al-Islāmīya ）」となった。

バグダーディーは 1971 年にサーマッラーに生まれたイラク人とされている。インターネット上に散らばるバグダーディーの伝記[9]によれば、生まれた家は、宗教的な家系で、サーマッラーやディヤーラーに散らばるブーバドリー族（al-Būbadrī, あるいは Badrī）に属しているという。バグダーディーが、クラシー（クライシュ族出身者）、フサイニー（第 4 代カリフ、アリーの子フサインの子孫）を名乗っていたのを信憑性がないとみなしていたが、ブーバドリー部族はクライシュ族に連なる家系ともされており、これはあながち虚偽ではないと考えられる。

バグダーディーはサッダーム・フセイン・イスラーム学大学（Jāmi‘a Ṣaddām Ḥusayn li al-‘Ulūm al-Islāmīya）を卒業したとされる。同大学はサッダーム時代に創設された最初のイスラーム大学で、現在はイラーキーヤ大学（あるいはイラーキー大学 al-Jāmi‘a al-‘Irāqīya）と名称を変更している。バグダーディーは修士号、博士号も取得したとされている。

大学を出たあとは、サーマッラーのアフマド・ブン・ハンバル・モスクでイマームをしていたが、イラク戦争後、反米軍事活動に従事していたともされる。世俗的なサッダーム・フセイン政権時代に宗教系の大学を卒業するというのはかなり宗教心が高いと考えられ、インターネット上の情報ではその時代にすでにジハード主義活動を行っていたともいわれているが、バグダードのクベイシー・モスクやファッルージャ・モスクでもイマームや説教師として活躍していたという情報もある。

しかし、米軍によって逮捕され、キャンプ・ブッカで拘束されたのち、過激化したとの説もある。「スンナと共同体の民軍」を設立、そのシャリーア委員会のメンバーとなり、2006

年には、イラク・ムジャーヒディーン諮問評議会に参加し[10]、イラク・イスラーム国のシャリーア委員会メンバーから、アブーオマル・バグダーディーの死後、イラク・イスラーム国のリーダーに選ばれた。

アブーバクル・バグダーディーについては元ムスリム同胞団員との説もある[11]。これは、サウジアラビア系のアラビア語日刊紙シャルクルアウサト紙が、カタル在住の有名なイスラーム法学者でムスリム同胞団とも関係が深いとされるユースフ・カラダーウィーの発言として報じたものだ。

６．IS の政策

IS がアルカイダを含む、他のジハード主義系テロ組織と大きく異なるのは、「統治」の問題であろう。他の組織と違って、IS は一定の領域を、彼らの考えるイスラームにもとづき統治していると主張する。カリフ制の樹立はまさにその一環であり、そのほかにも、たとえば、奴隷制の復活、墓廟の破壊、人頭税の導入、金銀銅の貨幣導入など、実効性はともかく、いくつかの特徴的な政策を打ち出している。

一方、斬首に代表される残虐な戦術は IS の代名詞となっているが、イラクにおいてこの戦術が一般化したのはザルカーウィーの時代である。ザルカーウィーらは、人質にとった欧米人にしばしばオレンジ色の服を着せ、命乞いをさせたうえで、ナイフを使って首を切断するという手法を多用した。オレンジ色は、米国がグアンタナモ基地で拘束していたムスリムたちが着せられていた囚人服の色であり、明らかにそれへの報復を心算しているといえる。

斬首という手法は、IS の視点に立てば、けっして非難されるものではなかった。なぜなら、古典的なイスラーム法では一般的に、捕虜は、首を刎ねて殺す、奴隷にする、敵の捕虜と交換したり、金で釈放したりする、寛大にあつかって釈放する、という 5 つの選択肢から自由に選ぶことできると定められているからである。

他方、火刑については、イスラームにおいては遺体損壊にあたるとか、あるいは火刑はアッラーにのみ許された大権であるなどといわれ、許されないとみる見かたが一般的であるが、IS は同害報復の原則を持ち出し、相手が火を用いて、ムスリムを殺害した場合には、こちら側も火を用いて処刑することが許されると考えている。

７．メディア戦略

IS がメディア戦略に長けているというのはしばしば指摘されるところである。すでに AQ

も、また AQI も、インターネットを活用したメディア戦略を展開していたが、IS はそれをさらに洗練・拡張させたといえるだろう。ファジュル（Markaz al-Fajr li al-I‘lām）やフルカーン・メディア（Mu’assasa al-Furqān）と呼ばれるメディア配信部門、メディア制作組織は AQI 時代からつづく IS の最重要メディア部門であるが、イァティサーム機関（Mu’assasa al-I‘tiṣām）といった新しい組織も目立つようになっている。

AQI 時代から ISI 時代にかけてアラビア語のインターネット掲示板が主たる宣伝の場であったが、近年はツイッターなどの SNS に主たる活動の場が移っている。最近ではそれに加えて、Telegram などのアプリも活用されるようになった。IS 時代にはさらにハヤート・メディア・センター（Alhayat Media Center）というメディア部門が登場してきた。これも主たる活躍の舞台は SNS であるが、こちらは、フルカーンやイァティサームと異なり、基本的に英語など欧米語による広報を担当している。現在、IS は英語の Dabiq、仏語の Dār al-Islām、トルコ語の Konstantiniyye、ロシア語の Istok といった非アラビア語の機関誌をオンライン上で発行している（なお、Dabiq はインドネシア語、ボスニア語など多言語展開している）。

そのほか、日報にあたる Idhā‘a al-Bayān もオンラインで視聴できるほか、戦果報告としての al-Naba’、ジハードを慫慂するアカペラの歌を配信する Ajnād も人気がある。さらに、個別のテーマごとに冊子体の解説書を発行している Maktaba al-Himma も興味深い。これらは、IS のイデオロギーを理解するための必読の文献となっている。

また、こうした積極的なプロパガンダが功を奏し、IS 領域内に多くの外国人ムジャーヒディーンが流入したことも重要であろう。人数でいうと、チュニジア人やサウジ人の多さが際立つが、そのほかトルコ人、フランス人、ロシア人など非アラブ圏からの流入も顕著である。2015 年 11 月のパリでの同時多発テロは、こうしたシリア帰り、イラク帰りがそれぞれの国に戻ってから引き起こすテロの恐ろしさを如実に示した事件となった。

８．IS の資金源

IS の資金源についてははっきりわかっていない。当初から、湾岸諸国からの寄付や占領した地域からの戦利品、略奪した文化財などの密輸、啓典の民からの人頭税、制圧した油田からの原油や石油製品の密売、それに略奪や拘束した人質の身代金などが重要な資金源として挙げられているが、その多くが実は証拠不十分である。

メディアはしばしば IS について「もっとも豊かなテロ組織」とのレッテルをはっているが、その主たる要素はだいたい石油である。しかし、2014 年夏以降、米国を中心とする有志連合がシリア空爆を開始し、IS の制圧していた油田や製油施設を破壊しており、今日、

生産量は相当減少しているはずである。それだけではない。油価も大幅に下落しており、それだけでも、IS にとっては大きな打撃となったはずである。しかも、技術的な問題もある。たとえば、IS が制圧しているとされる油井から生産される石油の多くは重質油であり、使えるものにするためには、それ相応の技術力が必要とされる。IS に石油を生産し、精製するのに十分な技術があるとは思えない。

人頭税など国内で調達できる資金も、キリスト教徒の多くがシリアを去り、また奴隷化された現状では、それほど多く期待できない。文化財の密輸も限度があるし、シリアを離れた人たちの家を略奪したり、その資産を押収したりするのも、持続可能な資金源とはいいがたい。その意味では、消去法でいえば、外部からの資金流入が IS の財政を支えているというのが合理的な結論といえるだろう。

９．IS の支配領域

2015 年末現在、IS の支配領域は徐々に減少しているといわれている。しかし、もともと面で統治している地域は限定されており、多くは点と線による支配にすぎない。イラクでいえば、西部から中部のスンナ派住民が多い地域を中心に勢力を固めており、またシリアでは東部のイラクとの国境近くから北部のアレッポ、中部のパルミュラやダマスカス近郊を勢力範囲としている。IS はこれらの地域を「県（wilāya）」という行政区分にわけ、それぞれ統治を行っていると主張しているが、おそらく名目上の支配にすぎないと思われる。

一方、カリフ制宣言後、世界中のジハード主義組織やジハード主義者たちから「カリフ」バグダーディーに対し忠誠を誓う声が上がったが、現在まで IS 本体によって、その忠誠の誓いがエンドースされているのは、リビア、アルジェリア、サウジアラビア、シナイ半島、イエメン、アフガニスタン、コーカサス、ナイジェリアにかぎられている。これらのうち、リビアやサウジアラビア、イエメン、コーカサスはさらにいくつかの県に分割されており、テロを起こした場合、それぞれの県名義で犯行声明が出されるのが一般的である。

おわりに

IS の勢力拡大によって米国やアラブ諸国を中心とする有志連合が IS を標的にした軍事作戦を開始すると、IS は、捕虜にしていた西側のジャーナリストらを殺害する人質戦術に打って出た。その一環として 2015 年に日本人 2 名が IS によって殺害されたのは記憶に新しい。

すでに IS のテロはイラクやシリアの範囲を超え、ヨーロッパやアメリカ、さらには南アジア、東南アジアにまで拡大している。日本に関してだけいっても、シリアで殺害された 2

人のほかに、チュニジアでは 3 人、バングラデシュでも 1 人が IS の犠牲になっている。IS の脅威はけっして他人事ではないのである。

参考文献

‘Allūsh, Muḥammad. *Dā‘ish wa Akhwātha min al-Qā‘ida ilā al-Dawla al-Islāmīya*. Bayrūt: Riad el-Rayyes Books, 2015.

‘Atwān, ‘Abd al-Bārī. *al-Dawla al-Islāmīya: al-Judhūr, al-Tawahhush, al-Mustaqbal*. London: Dār al-Sāqī, 2015.

Adnan, Sinan, and Reese, Aaron. *Beyond the Islamic State: Iraq's Sunni Insurgency*. Middle East Security Report 24, Institute for the Study of War, 2014.

al-Athrī, Abū Hamām Bakr . *Mad al-Ayādī li Bay‘a Amīr al-Mu’minīn Abī Bakr al-Baghdādī.* 日付不明.

al-Athrī, Abū Hamām Bakr b. ‘Abd al-‘Azīz. *Mad al-Ayādī li-Bay‘a al-Baghdādī.* 日付不明.

al-Hāshimi, Hishām. *‘Ālam Dā‘ish: Tanẓim al-Dawla al-Islāmīya fī al-‘Irāq wa al-Shām*. London: Dār al-Ḥikma, 2015.

al-‘Ubaydi, Muhammad; Lahoud, Nelly; Milton, Daniel; Price, Bryan. *The Group That Calls Itself a State: Understanding the Evolution and Challenges of the Islamic State*. The Combatting Terrorism Center at West Point. December 2014

Barret, Richard. Foreign Fighters in Syria. The Soufan Group, 2014.

Bilger, Alex. *ISIS Annual Reports Reveal a Metrics-Driven Military Command.* Backgrounder, Institute for the Study of War, 2014.

Boghardt, Lori Plotkin. *Saudi Funding of ISIS*. Policy Watch 2275, the Washington Institute for Near East Policy, 2014.

Cockburn, Patrick. *The Rise of Islamic State: Isis and the New Sunni Revolution.* New York & London: Verso Books, 2015.

Dickinson, Elizabeth. *Playing with Fire: Why Private Gulf Financing for Syria's Extremist Rebels Risks Igniting Sectarian Conflict at Home*. Analysis Paper Number 16, Sabaan Center at Brookings, 2013.

Hashim, Ahmed. *From al-Qaida Affiliate to the Rise of the Islamic Caliphate: The Evolution of the Islamic State of Iraq and Syria (ISIS)*. Policy Report, S. Rajaratnam School of International Studies, Nanyang Technological University, 2014.

Ibrahim, Azeem. *The Resurgence of Al-Qaeda in Syria and Iraq*. Strategic Studies Institute, 2014.

Iraq's Jihadi Jack-in-the-Box. Middle East Briefing No 38, International Crisis Group, 2014.

Kirdar, M. J. *Al Qaeda in Iraq*. Homeland Security & Counterterrorism Program Transnational Threats Project, Center for Strategic & International Studies (CSIS), 2011.

Muḥammad, Jāsim. *Dāʻish: Iʻlān al-Dawla al-Islāmīya wa al-Sirāʻ ʻalā al-Bayʻa*. al-Qāhira: al-Maktab al-ʻArabī li al-Maʻārif, 2015.

Nance, Malcolm W. *The Terrorists of Iraq: Inside the Strategy and Tactics of the Iraqi Insurgency 2003-2014*. Boca Raton, FL: CRC Press, 2015.

Napoleoni, Loretta. *The Islamist Phoenix: The Islamic State and the Redrawing of the Middle East.* New York & Oakland: Seven Stories Press, 2014.

O'Bagy, Elizabeth. *The Free Syrian Army*. Middle East Security Report 9, Institute for the Study of War, March 2013.

Ould Mohamedou, Mohammad-Mahmoud. *ISIS and the Deceptive Rebooting of al Qaeda*. Geneva: Geneva Centre for Security Policy, 2014.

Sabri, Fareed. "The Caliphate and the Political Ideology of the Iraqi and Egyptian Muslim Brotherhood." *Arches Quarterly*, Winter 2012.

Shandib, Māzin. *Dāʻish: Māhiyatuh, Nash'atuh, Irhābuh, Ahdāfuh, Istratijīyatuh*. Bayrūt: Arab Scientific Publishers, Inc., 2014.

SITE Intelligence Group. *Islamic State Suicide Bombers by Nationality from October 1 to December 31, 2014*. SITE Intelligence Group, 2015.

Zelin, Aaron. *Foreign Jihadists in Syria: Tracking Recruitment Networks*. PolicyWatch 2186, Washington Institute for Near East Policy, 2013.

池内恵『イスラーム国の衝撃』文藝春秋、2015 年。

国枝昌樹『イスラム国の正体』朝日新聞出版、2015 年。

黒井文太郎『イスラム国の正体』ベストセラーズ、2014 年。

保坂修司編『新版 オサマ・ビンラディンの生涯と聖戦』朝日新聞出版、2011 年。

吉岡明子、山尾大編『「イスラーム国」の脅威とイラク』岩波書店、2014 年。

ロレッタ・ナポリオーニ『イスラム国――テロリストが国家をつくる時』文芸春秋、2014 年。

―注―

[1] 2003 年のイラク戦争の直前、米国はザルカーウィーのグループが AQ であり、サッダーム・フセイン政権と結託しているということを、米国のイラク攻撃を正当化する理由のひとつとして挙げていた。しかし、実際に彼のグループが AQ になったのは米軍のイラク占領がはじまって以降である。
[2] イスラーム以前のクライシュ族の支族のあいだで行われていた同盟。同盟の参加者は、誓いを行うため、香水の入った容器に手を浸し、カァバ神殿の壁のうえで乾かしたことからこの名前がつけられた。
[3] MSCI のリーダーだったアブダッラー・ビン・ラシード・バグダーディーからアブーオマル・バグダーディーへと変わっているが、一般に同一人物とみなされている。
[4] ただし、カリフを名乗らなくても、このタイトルを用いる事例はある。現代でいえば、モロッコの国王もそうだし、アフガニスタンのターリバーン政権の指導者だったモッラー・オマル、そしてその後継者も信徒の統率者の肩書を使っている。
[5] サーリフ・ムトラク、アドナーン・ドレイミー、ターリク・ハーシミーはいずれもイラクのスンナ派政治家。それぞれ、イラク国民対話戦線、イラク国民会議、イスラーム党の指導者。
[6] イラクのムスリム同胞団から発展した政党。
[7] 第 2 代カリフオマルが規定したとされるキリスト教徒とムスリムのあいだの契約。このなかにはキリスト教徒が遵守すべき多くの項目がリストアップされており、それらを守っているかぎり、キリスト教徒はイスラーム国家のなかでその信仰を維持することができる。ただし、この契約の歴史的信憑性については異論がある。
[8] そこで米軍によって逮捕され、キャンプ・ブッカに収監されてしまう。アブーバクル・バグダーディーも同キャンプに収監されていたといわれており、両者がそこで出会っている可能性もある。
[9] たとえば、 [A.-‘. al-Athrī 日付不明]などがしばしばジハード主義者等によって用いられている。
[10] ただし、創設メンバーから若干遅れて参加している。
[11] イラクのムスリム同胞団のイデオロギーのなかでもカリフ制樹立は大きな役割を果たしているが、あくまで長期的な目標としてとらえられていた [Sabri 2012]。